# 烏ケ尾第1号古墳発掘調査報告

—県営高北地区広域営農団地農道整備事業に伴う

埋蔵文化財の発掘調査—

1983

広　島　県　教　育　委　員　会

(財)広島県埋蔵文化財調査センター

# 目　　次

Ⅰ　はじめに……（1）
Ⅱ　位置と環境……（2）
Ⅲ　検出の遺構……（4）
Ⅳ　出土遺物……（12）
Ⅴ　ま と め……（16）

# 例　　言

1．本報告書は県営高北地区広域営農団地農道整備事業に伴い，昭和57年7月に実施した烏ケ尾第1号古墳の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は広島県農政部から配当替をうけた広島県教育委員会が，(財)広島県埋蔵文化財調査センターに委託して実施した。

3．発掘調査は，(財)広島県埋蔵文化財調査センター調査研究課　三枝健二，松井和幸があたり，出土遺物の整理，実測，写真撮影は三枝が行った。

4．本書の執筆及び編集は三枝が担当した。

5．本書に掲載した第1図は，建設省国土地理院発行の50,000分の1地形図(八重・可部)を使用したものである。

## 挿　図　目　次

第1図　烏ケ尾古墳群位置図　(1:50,000)……(1)
第2図　烏ケ尾古墳群及び調査区配置図　(1:1,000)……(4)
第3図　烏ケ尾第1号古墳調査前地形図　(1:100)……(5)
第4図　烏ケ尾第1号古墳墳丘実測図　(1:100)……(6)
第5図　烏ケ尾第1号古墳墳丘断面図　(1:60)……(8)
第6図　烏ケ尾第1号古墳石室実測図〈1〉　(1:30)……(10)
第7図　烏ケ尾第1号古墳石室実測図〈2〉　(1:30)……(折込)
第8図　烏ケ尾第1号古墳出土遺物実測図　(1:3)……(12)

## 表　目　次

第1表　烏ケ尾第1号古墳出土遺物観察表……(13)

## 図　版　目　次

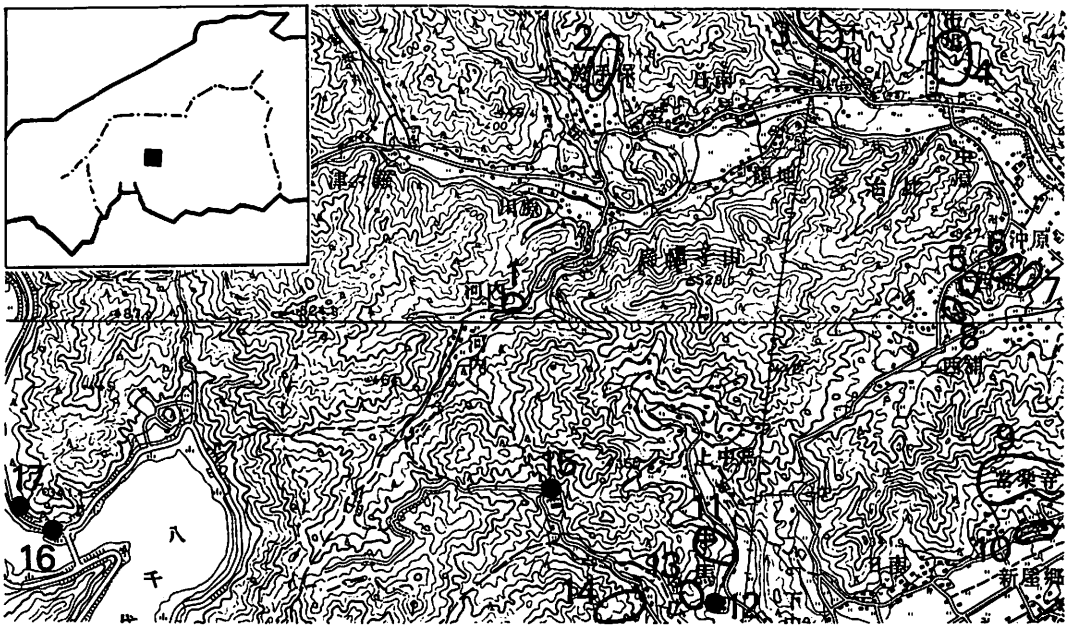
図版1 a 烏ケ尾古墳群遠景　(東より)
b 烏ケ尾第1号古墳調査前近景　(北東より)
図版2 a 烏ケ尾第1号古墳墳丘及び石室検出状況　(正面より)
b　同　上　(背後より)
図版3 a 烏ケ尾第1号古墳墳丘及び石室検出状況　(北より)
b　同　上　奥壁背後裏込め状況　(北より)
図版4 a 烏ケ尾第1号古墳石室検出状況　(正面より)
b　同　上　(背後より)
図版5 a 烏ケ尾第1号古墳石室検出状況　(東南より)
b 玄室棺台及び遺物出土状況
図版6 a 烏ケ尾第1号古墳開口部遺物出土状況
b　同　上　出土遺物

# Ⅰ はじめに

烏ケ尾第１号古墳の調査は県営高北地区広域営農団地農道整備事業に伴うものである。

事業の実施に先がけて昭和56年11月広島県可部農林事務所高田地方耕地事業所から農道整備事業用地内に於ける埋蔵文化財の有無ならびに取扱いについての照会があり，広島県教育委員会（以下県教委）と吉田町教育委員会で昭和57年２月に分布調査を行って，予定地内で古墳２基（烏ケ尾第１・２号古墳）を確認した。これらの遺跡の取扱いを協議した結果，烏ケ尾第２号古墳は墳丘のごく一部が道路法面にかかるだけであることから若干の設計変更で現状保存することが可能であったが，第１号古墳は路線内中央部に所在して計画変更が困難なため，事前の発掘調査をすることになった。昭和57年５月，広島県可部農林事務所長から広島県教育委員会教育長宛にこの古墳の発掘調査について依頼があり，県教委から調査を委託された財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが，昭和57年６月，文化庁長官宛に発掘届を提出，同年７月５日から７月31日まで延べ20日間にわたり調査を実施した。調査面積は約120㎡である。

なお調査にあたっては，広島県可部農林事務所高田地方耕地事業所，広島県教育委員会，吉田町教育委員会，株式会社堰楽工務店ならびに地元の方々から多大な御協力を受けた。関係各位に謝意を表したい。




**第１図**　烏ケ尾古墳群位置図(1:50,000)

１．烏ケ尾古墳群　２．於手保古墳群　３．千川古墳群　４．塚ケ鼻古墳群・市場遺跡
５．日南山古墳群　６．福光古墳群　７．秋近古墳群　８．八幡山古墳群　９．常楽寺遺跡
10．船山古墳群　11．中馬八ッ塚古墳群　12．明官寺廃寺跡　13．水越山古墳群
14．金広古墳群　15．長者原窯跡　16．大迫遺跡　17．土師大迫古墳

# II 位置と環境

烏ケ尾第1号古墳は高田郡吉田町大字中馬字烏ケ尾に位置する。周辺の地形は，白亜紀高田流紋岩類を基盤とし，標高600～400m級の山塊が広く分布しており，その山間に可愛川（江ノ川）水系の一支流である多治比川などの小河川が狭長な沖積地形を形成している。

同古墳群も，この多治比川の一支流沿いにあたり，東流する河内川を挟んだ幅100mに満たない沖積面と，背後に迫る山塊東南斜面から派生した幾つかの尾根裾部との接点付近に点在している。

町内の遺跡を概観すれば，まず旧石器時代の遺跡は未だ報告されていないが，同一水系の可愛川上流にあたる大朝町地宗寺遺跡[1]をはじめ下流の三次市周辺などで，ナイフ形石器などの旧石器時代遺物が出土しており，将来町内においても，その分布が確かめられるものと思われる。

次いで縄文時代では，多治比川流域の市場遺跡で早期の押型文土器が採集されている他は明らかでないが，多治比の於手保では縄文時代のものと思われる磨製石斧が出土しており今後当該期の遺跡の発見される可能性は高い。

弥生時代になると，前・中期は遺跡数も少ないものの，後期になると，大小の河川流域で，その沖積地を生産基盤とした集落の形成が窺われ，常楽寺遺跡，相合会下堂遺跡，青山遺跡などの集落遺跡の他に，川本遺跡（後期・土器棺）などの墳墓遺跡が形成されている。

古墳時代に入ると，町内では先の相合会下堂，青山両遺跡で古式土師器が出土しており，弥生時代後期以降，継続して集落が営まれている。周辺の調査例としては美土里町上里遺跡[2]，高宮町寸志名遺跡[3]などがある。

町内の古墳を概観すると，前半期では，石蓋土壙，箱式石棺などからなる池ノ内遺跡，箱式石棺を主体とする日南山古墳群，船山古墳群などがあり，特に日南山第1号古墳[4]は墳丘が帆立貝形をなすことで注目されている。また箱式石棺のうちには船山第1号古墳のように竪穴式石室との折衷形態をなすもの，また八幡山第1号古墳[5]のように竪穴式石室をなすものもある。この古墳は出土した須恵器から6世紀中葉頃とされている。

これに対し横穴式石室の導入される後半期に移ると，各河川流域に数多くの群集墳が形成されている。烏ケ尾古墳群もその一つで，周辺には南側の中馬を中心とした丘陵一帯に，中馬八ッ塚古墳群，水越古墳群，金広古墳群などが，更に同一水系の多治比川流域には，於手保古墳群，千川古墳群，塚ケ鼻古墳群などが分布，八千代町八千代湖周辺でも，七郎谷古墳群，大地原古墳群をはじめ，県内では唯一の装飾古墳である土師大迫古墳[6]などが分布している。

この他の遺跡としては高宮町明連窯跡[7]，同矢賀迫窯跡[8]など古窯跡のほか，芸北地域最古の寺院跡とされる明官寺廃寺跡[9]がある。

(注)

(1) 広島県教育委員会,(財)広島県埋蔵文化財調査センター『地宗寺遺跡発掘調査報告 ―国道261号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査―』1982年

(2) 上里遺跡・奥垣内城跡発掘調査団『上里遺跡・奥垣内城跡発掘調査概報』 1979年

(3) 広島県教育委員会「寸志名遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告』(2) 1979年

(4) 広島県教育委員会『高田郡吉田町日南山古墳の発掘調査』吉田町教育委員会 1974年

(5) 広島県教育委員会「八幡山第1号古墳発掘調査概要」『高田郡吉田町日南山古墳の発掘調査』吉田町教育委員会 1974年

(6) 土師埋蔵文化財調査団『土師・大迫古墳―土師ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告―』 1973年

(7) 広島県教育委員会「明連窯跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 1979年

(8) 広島県教育委員会「矢賀迫窯跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 1979年

(9) 松下正司「安芸・明官寺廃寺出土の古瓦」『広島県文化財ニュース』第83号 1979年

そのほかの遺跡については，主に以下によった。

小都隆「先史時代の高田郡」『高田郡史』上巻 高田郡町村会 1972年

小都隆「吉田町の遺跡と遺物」『広島県文化財ニュース』第83号 1979年

# III 検出の遺構

## 1）調査の概要

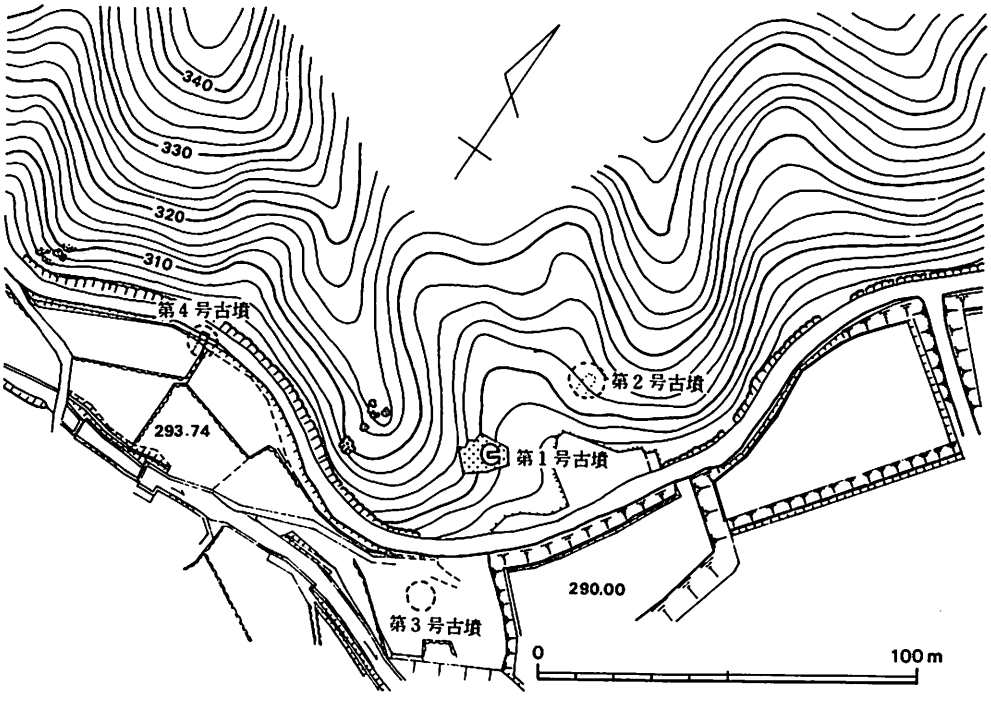
烏ケ尾第１号古墳は前述の様に，北東に延びる尾根先端近くの東側斜面裾の傾斜変換線付近に占地する。

同丘陵は傾斜角約30～45°前後と急峻で，古墳東側前面には尾根に挟まれた狭い畑地がある。調査前の状況では，古墳前面の畑地境に林道が迂回し，石室も天井石および側壁の一部が露出，墳丘の遺存もかなり悪いものと思われた。また背後の斜面には長さ約７ｍにわたって，半円状に傾斜を増す部分があり，背部地山整形と思われ，その下端の径から，径約７ｍ前後，高さ約１ｍ程の規模を持ち，東側に向って開口する横穴式石室を持つ円墳が想定された。

調査にあたっては，露出している天井石の背後で，ほぼ墳丘中央部にあたると思われる点を基点として，想定される石室中軸線に合わせ，等高線に直交する東西とそれに直交する南北の基線を設け土層観察用の畔として，４区分法で調査を行った。

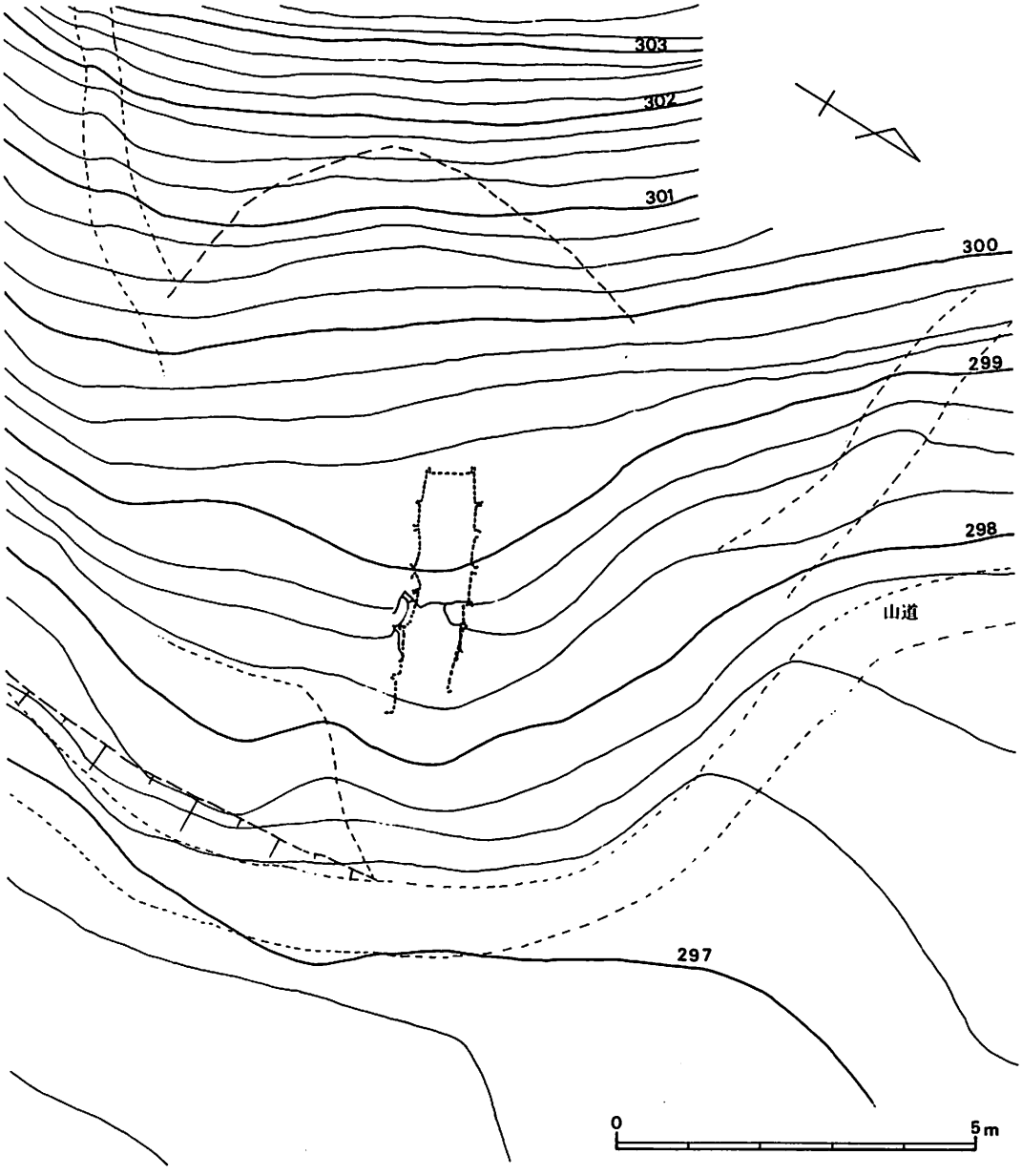
掘下げた結果，墳丘は背後の丘陵斜面をカットし，２段掘りの掘方をもつ横穴式石室で，背後に周溝を廻らせるものであることが確認された。

また石室は，天井石残存部にあたる玄室部分では流入土が充満し床面などは良好に遺存して




**第２図**　烏ケ尾古墳群及び調査区配置図(アミ目は調査区)(1:2,000)

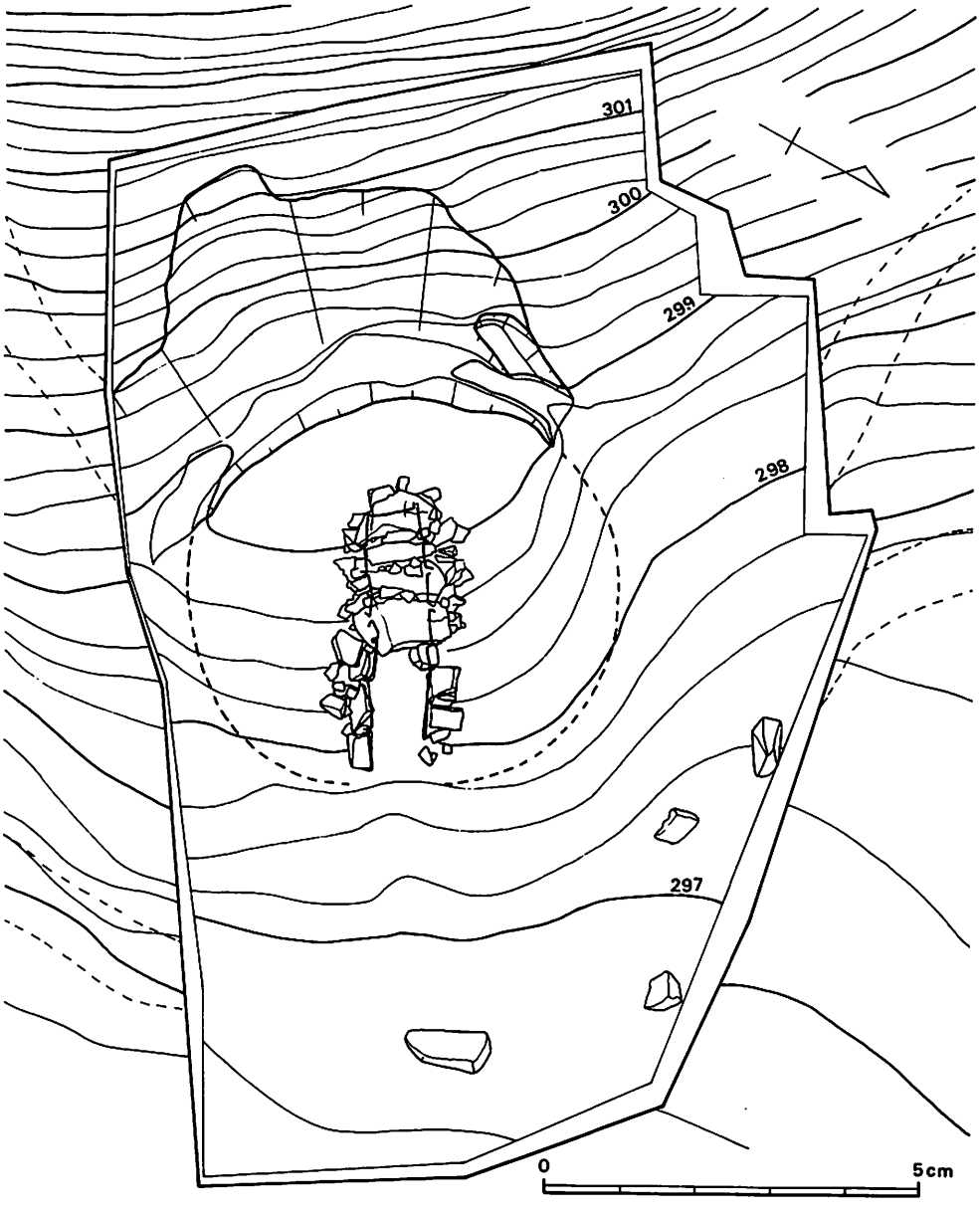
いたが，羨道部分では床面全体が，また開口部も部分的に床面近くまで開墾時の攪乱が及んでおり，羨道部天井石は墳丘下斜面際に転落し，両側壁上半分の石材も石室内外の攪乱部に散乱する状況を示していた。




第3図　烏ケ尾第1号古墳調査前地形図(1:100)

2）地山整形および墳丘

本古墳周辺の基本的な層序は表土層，黒褐色土層，黒色土層となり，更にその下部には黄褐色系土層を経て岩盤となっている。これら自然層は自然小角礫を多く含み，特に黒褐色土層以下は層厚も厚く，礫も多く混入し，尾根上方からの崖錐性の斜面堆積層といえ，地山整形・墳丘築造面は，旧表土もしくはその削平面と考えられる黒褐色土層上面に求められる。




**第4図**　烏ケ尾第1号古墳墳丘実測図(1:100)

**地山整形**

背部斜面の整形と石室掘方の掘削に分れる。前者はまず，古墳背後にあたる尾根斜面を長さ6m以上，幅約1.5～3mにわたって傾斜角約45°で岩盤付近までカット・整形し，その下端を弧状に湾曲させ平坦面を造出している。

石室掘方はこの平坦面を，さきのカット面下端から0.8～1m程隔てて，その長軸を等高線に直交させて掘込んでいる。その状況は，羨道～開口部付近にかけて掘込み底面が第10層であり，大半を流失していたため不明瞭であったが，上面で最大長は石室開口部から5.1m，最大幅は石室奥壁付近に偏じて3.2mを計り，石室開口部に向かって徐々に狭まる形態をとる。背部ではカット面下端の平坦面を，側面では第10層上面から55°～60°の角度で約0.8mの深さに掘込み，その下端付近で緩いカーブを持ち壙底面に至っている。更にその下端から，玄室部分で0.5～0.7m内側に隔てて，ほぼ直角に2段目の掘方（最大長3.8m，最大幅1.4m，深さ0.5～0.8m）を掘込み，石室を構築している。

裏込めは，2段目の掘方内では腰石との間隙を暗黒褐色土で補う程度で，掘方上段で顕著にみられた。これを東西セクションの奥壁背後でみれば，地山および旧表土掘削の際掘出された土層を，層厚約10cm程で明黄褐色土，暗茶褐色土，黒色土層と，交互に良くしめながら掘方上面と天井石上部を結ぶ線まで埋込んでいる。この状況は南北セクション南側でも僅かに認められるが，北側掘方上面および羨道部前半においては上段掘方内に直に盛土を覆っている。

これは背後斜面からの地山の傾斜に併せて，南側から北側へ旧地表が傾斜を持っていたことを示し，北半では上段掘込面が南側に比べ低く，2段目掘方上端が40cmの差を持つ。このため，南側の上段掘方底面は天井石架構面に等しく，掘方内に版築状裏込めの必要なく盛土を行ったものと解される。

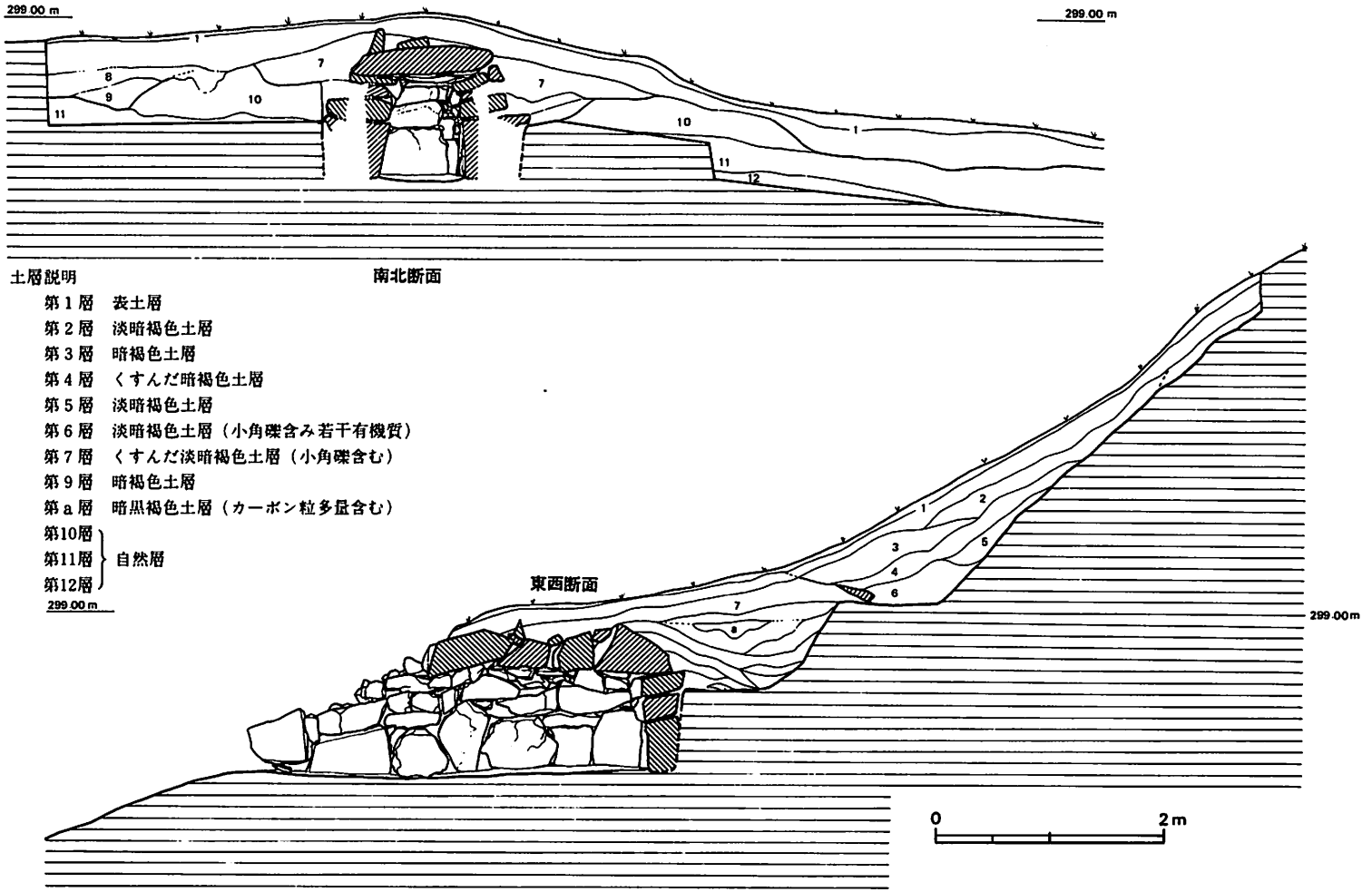
この他に東西セクション上段裏込土上層の上部で木炭粒を多量に含む部分を検出した。これは，平面プランでは不明瞭で，土壙状の掘込も持たず，周辺の加熱痕および焼土粒も認められないもので，レンズ状の堆積を示していた。

**墳丘**

墳丘盛土は南側を除いて裏込終了後，掘方上段掘込面の平坦面から天井石上面にかけて覆われ，現状では層厚0.2～0.4mで1層しか認められなかった。背部周溝に残る盛土墳丘ラインなどから推定しても，その高さは天井石上面から1mを越えるものではなかったものと考えられる。また背部墳端は，背後のカット面下端から0.5～0.7m程の間隔を保ち，半円状に周溝を形成させていた。

これらのことから，本古墳は，背部地山整形と掘方を2段掘りとすることで，裏込および盛土を最小限にとどめて墳丘を形成したものといえる。

墳丘前半部では何ら墳端施設を持たない。石室開口部および背部周溝の墳端内径から，東西径5.5m，南北径約5.7mの円墳が推定される。また，墳丘の高さは石室開口部と背部周溝底面




第5図　烏ケ尾第1号古墳墳丘断面図(1:60)

で約1.5mの比高差を計り，墳端は斜面を廻っている。このため，最低部にあたる石室開口部床面からでは，約1.7mの高さがある。

3）石　室

石室は主軸方位をN66.5°Eにもつ無袖式の横穴式石室である。その遺存状況は開墾に伴って羨道部上半を失っているものの，概して残りの良いものであった。

石室中軸線を基準にした規模は，全長3.33m，幅は奥壁際で0.64m，最大幅で0.80m，開口部で0.66mを計り，後述する様に右側壁で若干乱れるものの，緩い胴張りを示している。また，奥壁は，その両端で約9cmの差を持ち，若干斜めに据えられている。

奥壁は，広口積み板状石材1枚を掘方下端に接して，壙底面を僅かに掘窪めて，やや内傾気味に据え，その上にやや規模の小さな同様な板状石材を2段に横口積みしている。

また，奥壁と両側壁の接合関係は，両側壁ともその腰石広口面に奥壁の側面を接し，「冂」状に組まれている。

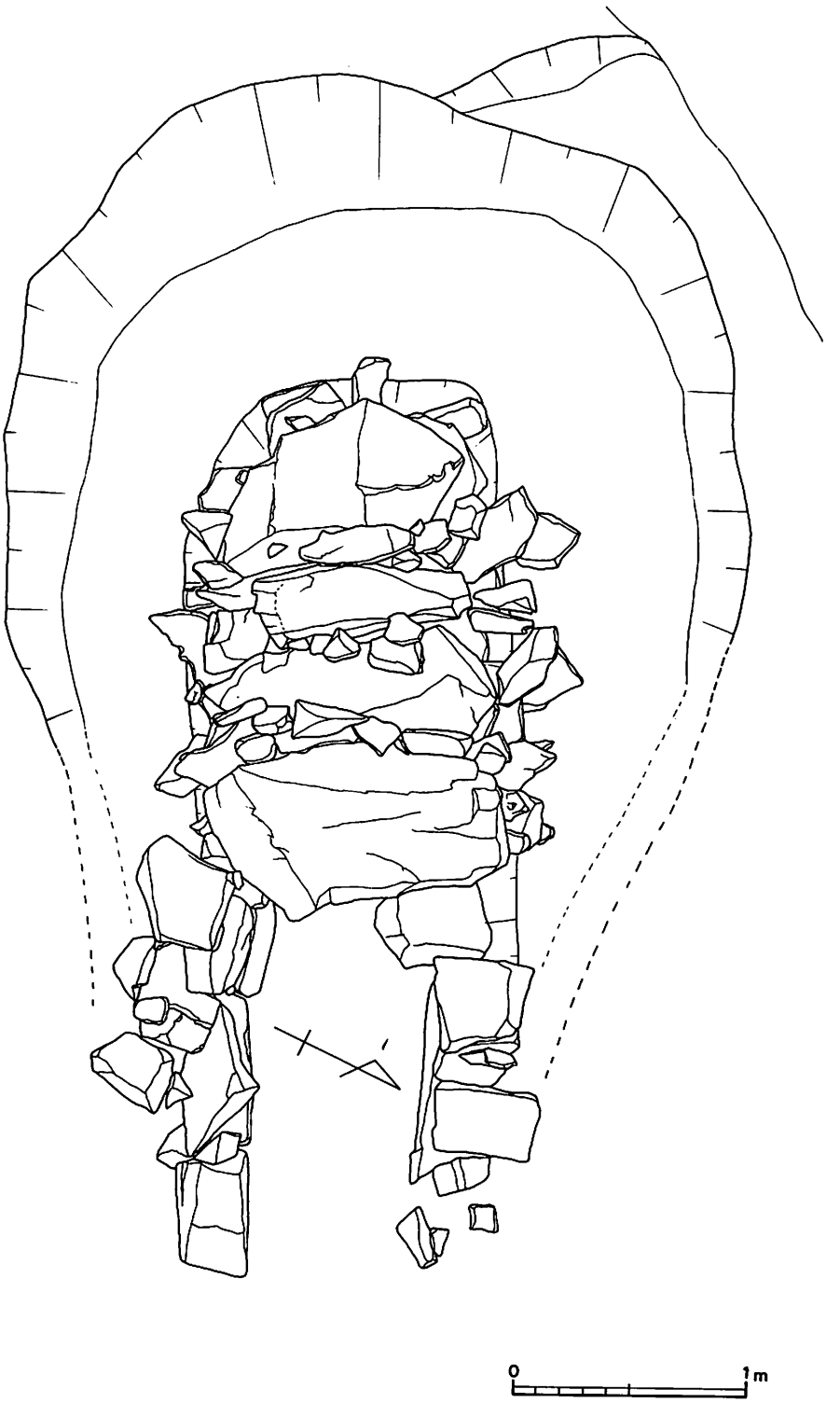
側壁は，左側壁開口部の腰石を失っているが，共に7枚の腰石から成っていたものと思われ，いずれも広口積みされている。遺存度の良い右側壁からみると，7枚の腰石は，奥壁より3番目（以下何番目と略）を縦長に積む他は，長軸を横位にして，奥壁同様10cm前後壙底面を掘窪めて据えている。2番目および5番目の腰石は，他に比べやや規模が小さく，板状石材を横口積みにして高さを揃え，その上に1～2段にわたり同様な規模の板状石材を横口積みし，全体に斜めに目地を揃え，更にその上面に小規模な板状石材および角礫を2段前後にわたって小口積みし，天井石架構面としている。

また7番目の開口部にあたる腰石底面は，壙底面より約10cm程高く，その間に板状の小礫を補っており，腰石上面を第1段目の横口積み石材上面にほぼ合わせている。

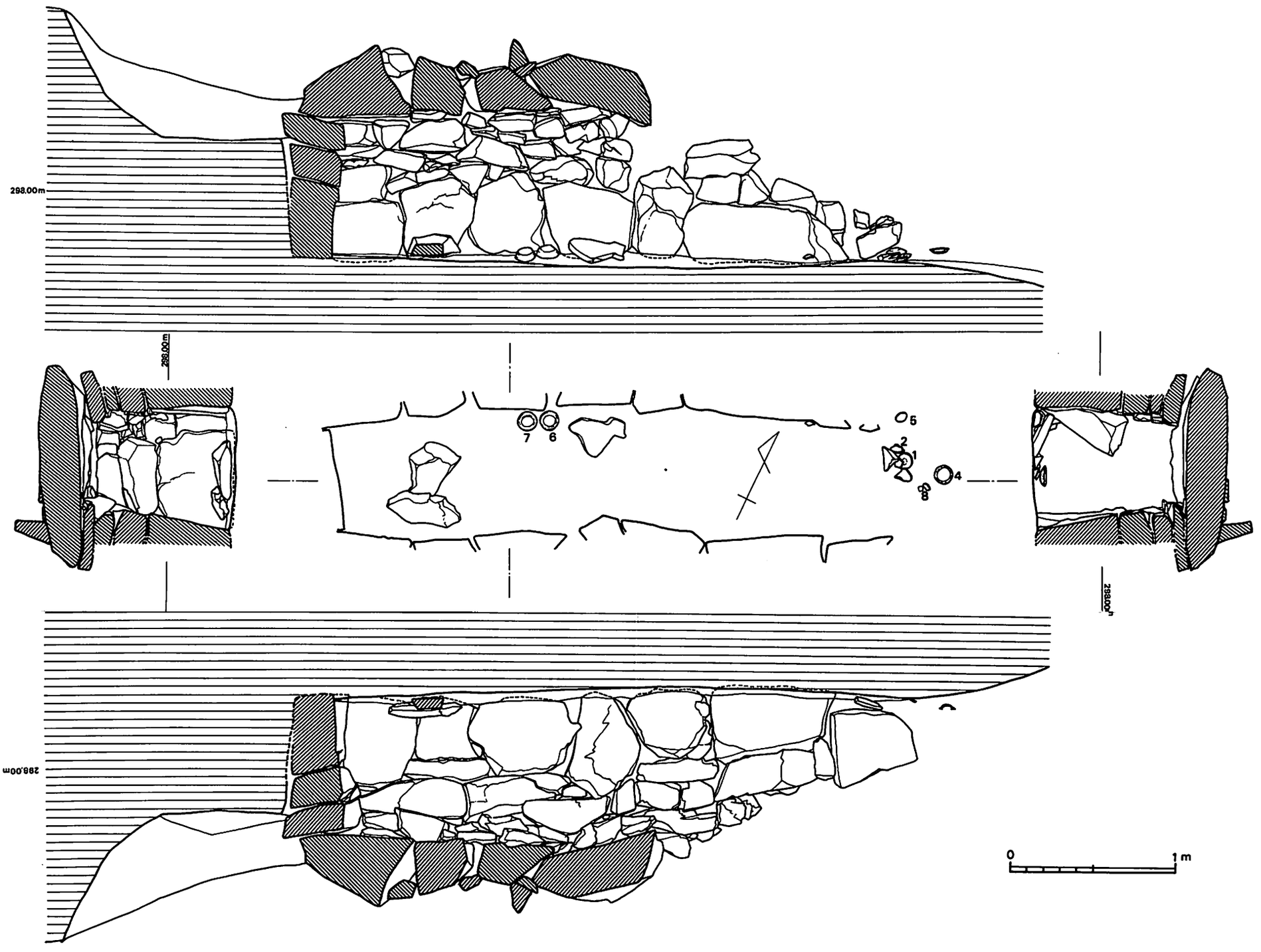
左側壁もこれとほぼ同様で，現状で腰石は6枚を数え，5番目のそれを右側壁同様に，縦長に据えている。腰石上への構築は，右側壁に比べやや乱れ，部分的に板状石材を横口積みにするものの，やや小規模な板状石材または角礫を小口積みもしくは横口状に小口積みし，右側壁同様斜めに目地を揃え，概ね4～5段で天井石架構面としている。

その積上げ状況は，左側壁では腰石はほぼ垂直で，天井石架構面付近で僅かに内側にせり出しているのに対し，右側壁では3番目の腰石までやや内傾気味に据えられ，上段の石積みもこれと面を合わせているため，10～20cm近く石室内にせり出している。

腰石の乱れを平面的にみれば右側壁4番目と左側壁5番目の縦位に積まれた腰石の角が，石室内に5～10cm程突出し，右側壁では5番目の腰石も4番目のそれと面を合わせているため約65cmにわたり平面プランに乱れが生じている。おのおのの突出する角からの石室幅は0.66～0.68mと狭くなっており，石材の用い方と相俟って玄室と羨道の区別を意識したものと解される。現存する棺台の状況から，左側壁5番目腰石の角を基準にして考えれば，玄室長は1.81m，幅は奥壁際で0.64m，奥壁から0.75mの最広部で幅0.80m，同じく1.35mで幅0.78mを計る。




**第6図**　烏ケ尾第1号古墳石室実測図〈1〉(1:30)




第7図　烏ケ尾第1号古墳石室実測図〈2〉(1:30)

これに対し，羨道部長は1.52mで，幅は奥壁から2.2mの最広部で玄室と等しく0.80m，開口部の最狭部分で0.66mを計ることとなる。

天井石は，長さ0.9～1.3m，幅0.3～0.8m，厚さ0.25～0.4m程の板状の角柱状石材を用い，奥壁部分から4枚が残存していた。その状況は奥壁から3枚目までが下面をほぼ水平に揃え上面の間隙を角礫もしくは板状礫で補っている。その高さは奥壁際で，床面から0.85m，3枚目で0.90mを計る。これに対し4枚目はその一辺を3枚目の石材の上面縁部に重ね，斜めに据えられており，3枚目との接点で1.02m，先端で0.87mの高さを計る。この4枚目天井石の端部は左側壁5番目の縦長の腰石とほぼ同じ位置にあたり，玄室部分にかけて天井石が高くなった構造をもっていたものと思われる。また，墳丘下の平坦面に転落している石材のうちの一枚は羨道部に用いられていた可能性が高く，計5枚から成っていたと考えられる。

石室床面は平坦で，墳丘下前面の平坦部とで約1m，付近の水田面とで約7.7mの比高差を計る。排水施設等はなく，壙底面に1～3cm程の厚さで暗褐色土を敷き床面としている。これは奥壁際ではきわめて薄く，壙底面が僅かに窪む石室中央付近にかけて2～3cmと均質的に施され，開口部へ至っており，奥壁際に比べ開口部で約4cm低くなっている。

棺台と思われる石は，奥壁から約0.3m隔て，中軸線よりやや右側壁に偏じて2個と，奥壁から1.4m隔てて1個の計3個を検出した。いずれも長さ30～45cm，幅20～30cm，厚さ5～10cm程の板状亜角礫を床面上に置いたもので，前者は厚さの薄い辺を重ね，その高さを揃えている。また羨道部寄りの後者は左側壁に偏じ，これと対となる石材の想定される右側壁寄りの部分は攪乱が及び存在しなかったが，現存する3個の石材から推定しても棺は石室中軸線に対してやや斜めに偏じて安置されたものと考えられる。

遺物は玄室と石室開口部で出土した。前者は羨道寄り棺台付近の左側壁に接して，奥壁から約1.2mの所で須恵器坏身2点（第8図6，7）が，口縁部を床面に接して出土した。後者は石室開口部から約0.3m外方にかけての，30×50cmの範囲で須恵器坏蓋4（1，2，4，5），平瓶体部片および土師器埦1（8）が出土した。このうち5は原位置を失っている可能性があるが，1，2，8はいずれも床面直上より出土し，4は床面から約5cm浮いて出土している。これらはその出土状態から追葬に伴うかき出し遺物と考えられる。

羨道部がほぼ全体に攪乱を受けているため，閉塞施設等の状況は不明であった。

# Ⅳ 出 土 遺 物

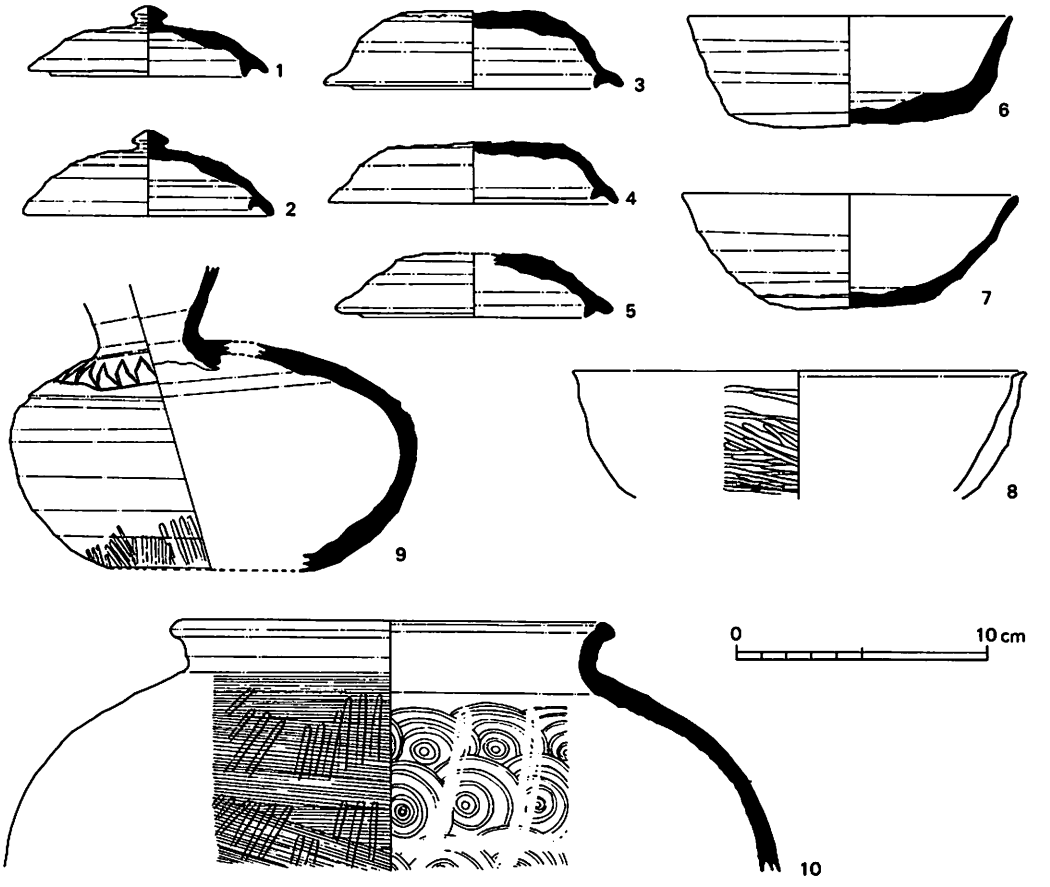
遺物は石室出土の他に，墳丘下斜面端で古墳石材と共に四散して出土した。双方を合わせれば須恵器は坏蓋５，坏身２，平瓶１，甕１，土師器は埦１個体分が出土した。

## 須恵器

坏蓋（第８図１～５）

Ⅰ類（１，２） 口径9.6～9.8cm，器高2.8～3.35cmを示す。擬宝珠様のつまみを付すもので，天井部は低く，低いかえりをもつ。

Ⅱ類（３～５） 口径6.1～7cm，器高2.4～3.1cmを示す。つまみを付さないもので天井部は概して平坦で，回転ヘラ切り未調整のもの(4)もみられ，３ではやや器高が高い。かえりはⅠ類同様口縁とほぼ同じかそれより低く，ハリツケ手法をとるもの(5)もみられる。




**第８図** 烏ケ尾第１号古墳出土遺物実測図(1:3)

坏身（第８図６，７）

口径12.9～13.4cm，器高4.4～4.6cmを示す。坏蓋をはじめ他の須恵器と比べ焼成は悪く，胎土も異なる。体・口縁部は斜外方へ直線的または外湾気味に高く立上がり，底部外面は回転ヘラ切りの後，一方向へ仕上げナデを施している。

平瓶（第８図９）

体部最大径上位に沈線を廻らせる。口頸部を中心に同心円状のヘラ描き沈線を廻らせ，その内側に連続する鋸歯文を描いており，一部にヘラ描き記号文をとどめる。

甕（第８図10）

短く外反する単純口縁を持ち，口径16.8cmを計る。

土師器

埦（第８図８）

小片化しているため正確な法量は不明であるが，口径約18cm程で，体・口縁部の立上がりは深く，外面をヘラ磨きしている。

以上これらの遺物は，その特徴から概ね７世期前半と考えられ，開口部の遺物に比べ，玄室内出土の坏身類はやや新相を示すものといえる。また前者の坏蓋類のうち，Ⅱ類としたつまみの付かないものは，Ⅰ類に比べ，口径と器高（天井部高）の比に若干の相違がみられるが，ほぼ同時期の所産と考えられ，坏身の逆転した形態をとるものとして扱った。

**第１表　烏ケ尾第１号古墳出土遺物観察表**

| No. | 器　種 | 法　量　(cm) | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏　蓋 | 口径　9.6<br>器高　2.8<br>つまみ径 1.4<br>つまみ高 0.8 | 天井部は低く，やや平坦で，口縁部は外下方に下り，端部を丸く終え，逆三角形のかえりをもつ。かえりはほぼ垂下し端部を丸くおさめる。天井部中央に偏平な擬宝珠様つまみを付す。 | マキ上げ，水ヒキ成形による。天井部の約$\frac{2}{3}$を回転ヘラ削り，他は回転ナデ調整。かえりはオリコミ技法による。内面中央は窪み，仕上ナデを（１回）施す。<br>ロクロ回転右方向。 | 胎土：１㎜内外の長石，石英粒を含む。<br>焼成：良好，堅緻。<br>色調：灰色。外面に自然釉。<br>備考：完形。石室開口部出土。 |
| 2 | 坏　蓋 | 口径　9.8<br>器高　3.35<br>つまみ径 1.5<br>つまみ高 0.8 | 天井部はやや低く丸味をもつ。口縁部は外下方に下り，端部を丸く終える。かえりは低く，内傾し，端部を鋭り気味に丸く終える。天井部中央に擬宝珠様つまみを付す。 | マキ上げ，水ヒキ成形による。天井部の約$\frac{2}{3}$を回転ヘラ削り，他は回転ナデ，かえりはオリコミ技法による。内面中央は窪み，片方向への仕上げナデを施す。<br>ロクロ回転右方向。 | 胎土：長石等細粒若干含むがきめ細か。<br>焼成：良好<br>色調：灰色<br>備考：$\frac{1}{2}$残存，石室開口部出土。 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 3 | 坏　蓋 | 口径　(12)<br>器高　3.1 | 天井部はやや高く，平坦面をもつが，その稜線は不明瞭で，口縁部は外下方に下り，口縁端部付近で更に開き気味となる。かえりは低く内傾し，端部を丸くおさめる。つまみは付さない。 | マキ上げ，水ヒキ成形による。天井部の約$\frac{1}{2}$を回転ヘラ削りし，乱雑な仕上げナデを施す。他は回転ナデ調整，かえりはオリコミ技法による。<br>ロクロ回転右方向。 | 胎土：1㎜程の石英粒含む。<br>焼成：良好<br>色調：淡灰褐色<br>備考：約$\frac{1}{3}$残存。墳丘外方斜面出土。 |
| 4 | 坏　蓋 | 口径　11.6<br>器高　2.4 | 天井部は低く平坦で稜線をもち，口縁部は外下方に下り，端部を丸くおさめる。かえりは低く内傾し，端部を丸くおさめる。 | マキ上げ，水ヒキ成形による。天井部の平坦部は回転ヘラ切り後未調整。他は回転ナデ調整。かえりはオリコミ技法による。内面は概ね平坦で片方向の仕上げナデを施す。<br>ロクロ回転右方向。 | 胎土：1㎜前後の長石，石英粒多く含み荒いが，ナデにより沈ましている。<br>焼成：良好<br>色調：淡灰色<br>備考：完形。石室開口部出土。 |
| 5 | 坏　蓋 | 口径　(11.1) | 天井部は低く，平坦部をもつが，その稜線は不明瞭で，口縁部は外下方に下がり，端部を丸くおさめる。かえりは内傾ぎみで，逆三角形を呈し端部を丸くおさめる。 | マキ上げ，水ヒキ成形による。天井部はヘラ切りの後，不定方向の仕上げナデ。内面中央も片方向の仕上げナデを施す。かえりはハリツケ技法による。<br>ロクロ回転左方向。 | 胎土：1～2㎜程の石英長石粒多く含む。<br>焼成：普通<br>色調：淡灰褐色<br>備考：約$\frac{1}{3}$残存。石室開口部出土。 |
| 6 | 坏　身 | 口径　12.9<br>器高　4.4<br>底径　9.5 | 体，口縁部は上外方に，ほぼ直線的に立上り，端部を丸く終える。底部は，ほぼ平坦でにぶい稜をもつ。 | マキ上げ，水ヒキ成形による。底部外面は回転ヘラ切り後，片方向に数回の仕上げナデを施す。他は回転ナデ調整。<br>ロクロ回転右方向。 | 胎土：砂粒多く，3㎜程の石英粒が目立つ。<br>焼成：ややあまい。<br>色調：乳灰白色<br>備考：完形。玄室床面出土。 |
| 7 | 坏　身 | 口径　13.4<br>器高　4.6<br>底径　7.3 | 体，口縁部は外湾気味に上外方に立上り，端部を丸く終える。底部は，ほぼ平坦で，にぶい稜をもつ。 | マキ上げ，水ヒキ成形による。底部外面は回転ヘラ切りの後片方向の仕上げナデ，内面も不定方向の仕上げナデを施す。他は回転ナデ。 | 胎土：1㎜内外の長石，石英等細砂粒多く含む。<br>焼成：あまい<br>色調：淡乳灰褐色<br>備考：完形，玄室床面出土。 |
| 8 | 土師器<br>埦 | 口径　(18) | 体，口縁部はやや外湾気味に外方に立上り，端部付近で外反，内面に平坦 | 体，口縁部外面を横方向のヘラ磨き。内面は丁寧なナデか。 | 胎土：1㎜以内の石英，長石等細砂粒多く含む |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | 面をもち，端部を丸く終える。 | | が概してきめ細か。<br>焼成：普通<br>色調：明赤褐色<br>備考：小片。石室開口部出土。 |
| 9 | 平　瓶 | 体部高　（9） | 口頸部は上外方に延びる。体部は総じて丸味をもち，断面形は倒卵形を呈す。胴部最大径の上位に幅広の沈線を回らす。<br>口頸部を中心として，同心円状のヘラ描き沈線を廻らせ，その内部に鋸歯状の連続文を施し，一部に直線的なヘラ記号文を施す。 | マキ上げ，水ヒキ成形による。上面開口部を円盤でふさぎ，口頸部の穴を穿ち接合する。体部は底部付近に平行タタキ目の上に乱雑なナデを施す。最大径付近を回転ナデ，口頸部付近をカキ目調整。頸部内外面も回転ナデ調整。 | 胎土：1㎜以内の細砂粒を含む。<br>焼成：良好，堅緻。<br>色調：灰色<br>備考：約$\frac{1}{3}$片。<br>墳丘下方斜面出土。 |
| 10 | 甕 | 口径　16.8 | 口頸部は短く，外反ぎみ立上り，端部は肥厚し，丸味をもち，端部内面には，僅かに緩い段を廻らす。 | 体部外面は縦方向の太い平行タタキ目の上にカキ目調整。内面は同心円状タタキの上に縦もしくは横方向のナデを施す。口頸部は回転ナデ調整。 | 胎土：1㎜程の石英粒やや多く含むがナデで沈めている。<br>焼成：良好，堅緻。<br>色調：暗灰色<br>備考：約$\frac{1}{3}$片。<br>墳丘下方斜面出土。 |

（　）内は推定復元値を示す。

# V　ま　と　め

烏ケ尾古墳群は計４基の古墳から成り，今回そのうちの第１号古墳が調査対象となった。ここでは，その調査によって得られた二，三の問題点に触れまとめとしたい。

まず墳丘についてみれば，本古墳はその斜面地形を利用し，背後の急斜面の整形と石室掘方を２段とする事で，掘方掘削及び裏込め作業にかかる工程を減じ，地山整形による視覚的な墳域の表現を行ったものと考えられる。

次いで内部主体は，河内川の下流に向って，北東方向に開口する無袖式の横穴式石室をとり，全長3.33ｍを計る緩い胴張りのするもので，両側壁及び天井部の石材構築状況から，玄室長1.81ｍ，羨道長1.52ｍ，幅は玄室では奥壁際で0.64ｍ，最広部0.80ｍ，羨道部との境で0.65ｍと狭まり，羨道部においても最広部0.80ｍ，開口部0.66ｍと，玄室最広部・最狭部の数値とほぼ等しい数値を示しており，奥壁両側面を両側壁面に接し，両側壁は腰石を主に横位に広口積し，右側壁４番目と左側壁５番目のそれを縦位に組むことで玄室と羨道を区別したものと考えられる。

腰石上への組上げは，左側壁で乱れているものの，概ね２～３段を横口積みし，更に角礫・板状小礫を小口または横口状に小口積みし，天井石架構面としている。全体に斜めに目地を揃え，２～３段階にわけて構築している。

また石室床面には排水溝等の施設はなく，壙底面に薄く土を敷き平坦な床面を形成しており，玄室内床面から棺台石及び坏身が出土した。開口部のかき出し遺物とあわせて本古墳の副葬品は，須恵器，土師器などの土器類のみで，鉄器類・玉類等は皆無であった。

これら第１次埋葬に伴う坏蓋と，第２次埋葬に伴う坏身についてみると，坏蓋Ⅰ類とⅡ類の差異は，前項で触れた様に同時期内の所産と考えられ，Ⅱ類は従来の坏身の逆転した形態と解される。千代田町石塚第１・２号古墳[(1)]などで報告されており，県内当該期の窯跡資料を中心とした編年[(2)]では，京梨地窯跡に示される坏身，蓋の逆転期にあたる。また坏身は口径も大きく，これに後続する明連窯跡もしくは矢ケ迫窯跡[(3)]に併行する頃のものと考えられ，本古墳の年代も概ね７世紀前半に築造，継続埋葬されたものと考えられる。

以上，本古墳は墳丘，石室とも小型化し，副葬品もきわめて貧弱といえる。しかし，このことが直に被葬者の性格を規定するとは即断し得ないであろう。

（注）

(1)　広島県教育委員会「石塚古墳発掘調査概報」　1974年

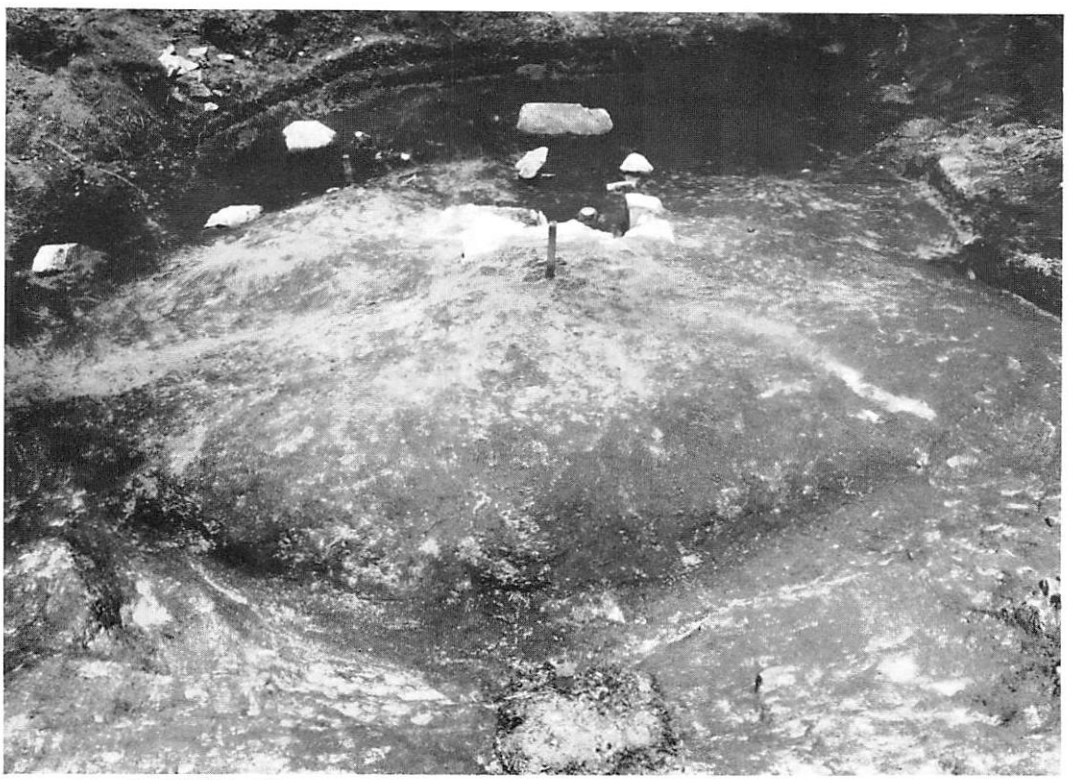
(2)　広島県口和町教育委員会「池津第１号古墳発掘調査報告書」　1979年

(3)　広島県教育委員会「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(2)　1979年

a．烏ヶ尾古墳群遠景（東より）

b．烏ヶ尾第１号古墳調査前近景（北東より）

a．烏ヶ尾第１号古墳墳丘および石室検出状況（正面より）

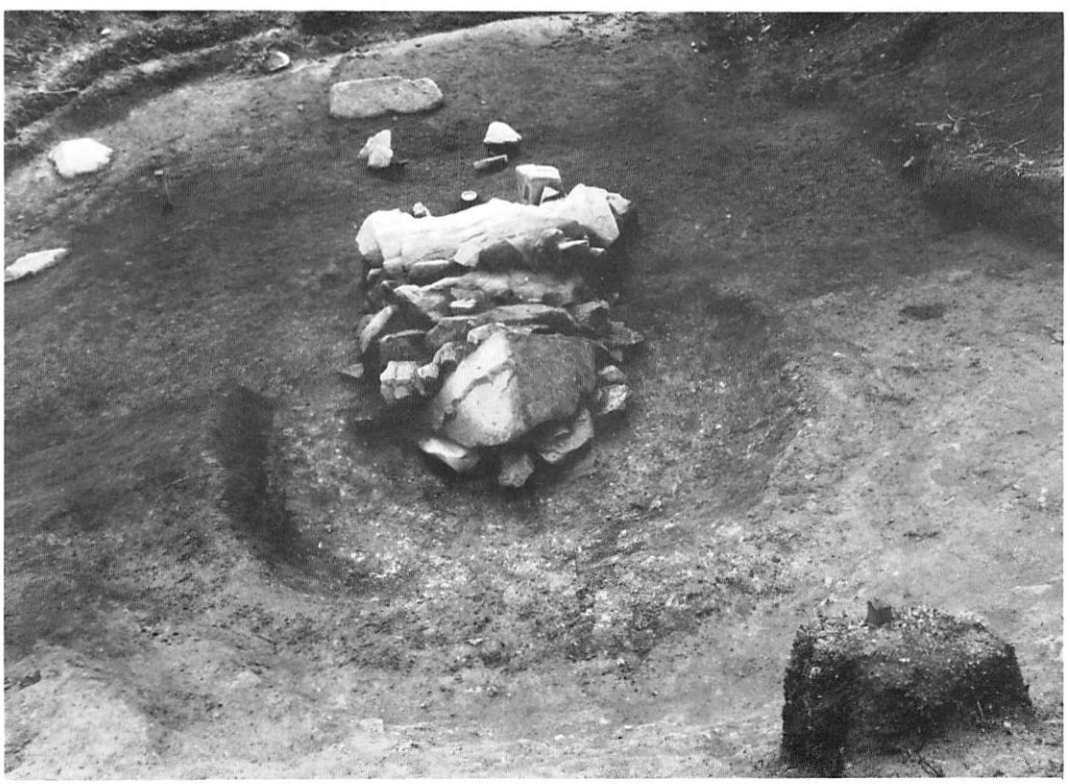


b．　同　上（背後より）

a．烏ヶ尾第１号古墳墳丘および石室検出状況（北より）

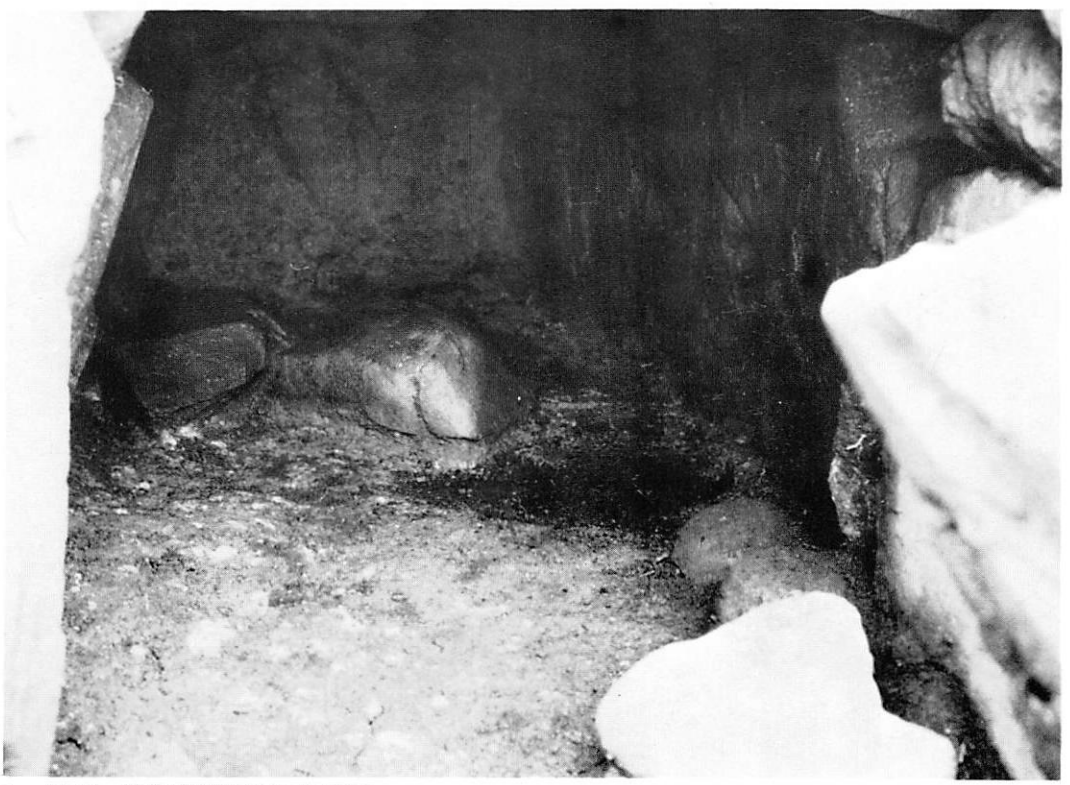
b．同上　奥壁背後裏込め状況（北より）

a．烏ヶ尾第１号古墳石室検出状況（正面より）



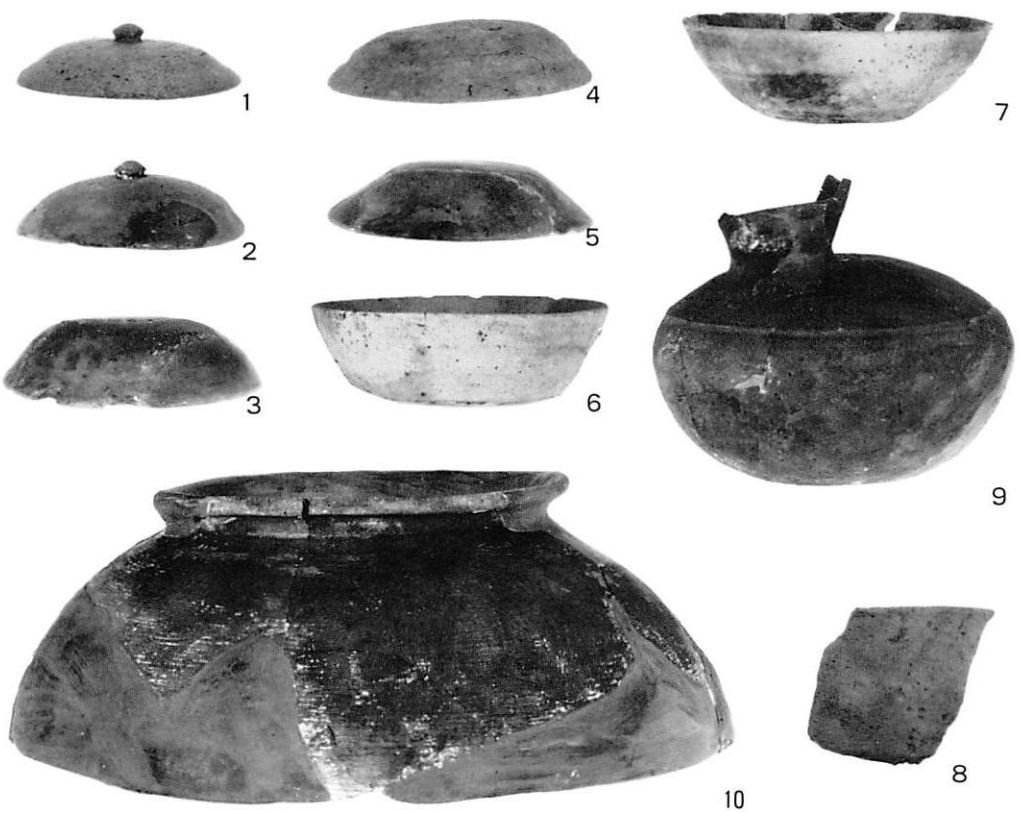
b．　同　　上（背後より）

a．烏ヶ尾第１号古墳石室検出状況（東南より）



b．玄室、棺台及び遺物出土状況

a．烏ヶ尾第１号古墳開口部遺物出土状況




b．　同　　上　出土遺物

# 烏ケ尾第1号古墳発掘調査報告

—県営高北地区広域営農団地農道
整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査—

1983(昭和58)年3月

編集
発行　広島県教育委員会
㈶広島県埋蔵文化財調査センター

印刷　大村印刷株式会社